

学位論文内容の要旨

報告番号	先端科学技術甲第 178 号	氏 名	小西 千秋
論文題目	都市空間と大学キャンパスの類同性から見た キャンパス非建蔽地における空間形成の対比的研究		

本研究は都市とキャンパスの類同性を前提にキャンパス非建蔽地を都市空間と捉え分析を行う。都市マスタープラン(以下、都市 MP)とキャンパスマスタープラン(以下、CMP)の対比から論点を導出し、道路に類する空間を線的なオープンスペース(以下、OS)、公園に類する空間を面的な OS に捉えて空間構成を確認する手法を提示する。これら OS の構成を空間認識の実験から検証を加え、都市のパブリックスペース(以下、PS)としてキャンパスが有する空間的特性を明らかにする。論文は以下全 7 章構成である。

第 1 章 序論 前提となる都市空間とキャンパス空間の類同性及び研究の意義

今日の都市において、人口の減少、感染症の蔓延における暮らし方の変化によって、PS に対してその重要性が再認識されている。以前より、地域の魅力向上や共通の価値を持つ場所を形成するために様々な取り組みがなされてきたが、都市空間は建築敷地や道路、公園のように管理主体が明確に区分して形成されることに課題がある。一方でキャンパスは大規模土地利用であるが故に小都市のように形成され、都市と類同性を有しつつ、管理区分が存在しないため柔軟な空間形成を可能としている。そこで本研究は都市とキャンパスの類同性を前提にキャンパス非建蔽地に如何なる空間を形成するのか明らかにすることで、都市空間に良好な PS を形成するために有用な知見の導出を意義とする。

第 2 章 都市 MP と CMP との対比による都市空間の計画・設計に向けた論点の導出

CMP を公開する国立大学 34 校 34 キャンパスを選定し、自治体の都市 MP の将来像からキャンパスの認識を把握し、CMP が示す将来像を対比的に分析する。都市 MP と CMP の対比から①都市部のキャンパスと市街地の連坦、②柔軟に機能を設定し得る非建蔽地、③非建蔽地において都市空間とキャンパス空間が連坦する可能性を本研究の論点として導出した。

第 3 章 東京圏における都市部キャンパスの非建蔽地に対する都市空間の認識

①より東京圏都市部立地 25 キャンパスを選定した。対象周辺の土地利用の変遷、都市 MP の将来像からキャンパスに対する認識を見ると、都市部の密集した市街地に比べ大規模な街区に広大な OS を有しつつ、都市の一部とする表示を確認した。密集する市街地においてキャンパスの OS は都市や周辺市街地にとって貴重な地域資源になる可能性がある。

第 4 章 都市空間とキャンパス空間との対比より表出するキャンパス非建蔽地の空間構成

物理的な境界線で非建蔽地を分節し、機能種別から利用制限・特定用途、通路空間、滞

留空間の3種に分類した。特に通路空間は対象に必ず存在し、非建蔽地の占める割合が最も変動することから、キャンパスを特徴付ける空間として着目する。通路空間を道路と見立て仮想的な街区に分割しキャンパスの構造を整理している。この構造を通路空間と滞留空間が持つ空間的広がりから線的OSと面的OSに再編し、非建蔽地の空間構成について5つの類型を提示している。道路と公園が区分されている都市空間に類似した構成である分離型、管理区分が存在しないキャンパス特有の構成である求心型や軸線型、市街地に開放された開放型、それらを組み合わせる複合型、これらの空間構成を導出した。

第5章 キャンパス非建蔽地の空間認識におけるOSの一体性

前章の空間構成の類型を代表するOSを対象に空間認識実験を行い、線的OSと面的OSに対する利用者の認識を検証する。実験は被験者が全天球画像とヘッドマウントディスプレイを用いた疑似的な空間体験を行い、OSのまとまりと動線を作図して2人1組で語り合いを行う。実験で認識されたOSとして、線的OSは都市空間の道路と類似した空間であるため通路としての利用が容易に想定され共通した認識が得られたことに対し、面的OSは利用目的や想定される行動が曖昧であるため認識にばらつきが生じた。その中で、各類型に線的OSと面的OSを分離せず一体的に認識する状況として、求心型の建物に囲われたOS、開放型の道路と連坦するOS、軸線型の軸線上のOSを確認した。

第6章 キャンパス非建蔽地の空間構成と空間認識との比較に現れる特有の性質

第4章の空間構成と第5章の空間認識との比較からキャンパスにおける特質の考証を行う。開放型のOSは都市空間である道路と連坦がみられ、分離型において線的OSと面的OSの分離が管理区分された都市空間と同様な空間構成を有している。一方、求心型の建物に囲われたOS、軸線型の軸線上のOSは、線的OSと面的OSの一体性を示し、管理主体の区分が存在しないキャンパスの特徴的な空間構成として存在する。複合型は各類型が組み合わせられ、キャンパスにおいて分離と一体の空間構成の共存が可能であることを示す。

第7章 キャンパス非建蔽地の空間形成の可能性と課題

以上より、都市とキャンパスとの類同性を前提として、非建蔽地の将来像、空間構成、空間認識について考証してきた。都市MP及びCMPが示す将来像では、①都市部におけるキャンパスと市街地の連坦、②柔軟に機能を設定し得る非建蔽地、③非建蔽地において都市空間とキャンパス空間が連坦する可能性を導出した。これらを本研究の論点として、キャンパス非建蔽地において線的OSと面的OSが都市空間の道路と公園に類似した機能を持ちつつ、キャンパスの特徴的な状況として線的OSと面的OSが一体性を有することを確認した。それらのOSの構成から導出した5種の類型は都市空間とキャンパス空間の連坦が可能であることを示し、パブリックスペースにも通じる有用な視点を導出したと考える。マスタープランや空間の機能は認識論として把握が可能であり、十分な余白空間を持ち、柔軟な空間性を有するキャンパス及びその周辺は、都市計画の要素を接続、編成して、共通した価値を認識する空間形成の計画要素として捉えることが有効である。